

優秀賞

## お姉ちゃんになった日

中央大学高等学校 2年 梅川 古都美

「仲の良い姉妹ねえ。」

私たちはよくそう言われる。妹は

「いやいや全然そんなことないです！」

と照れながら思いつき首を振る。私はそんな光景を見て、いつも思う。妹がいてくれて本当に良かった、と。

私が四歳のとき、母に「妹ができるよ」と伝えられた。当時のことはあまり記憶にないが、実感が湧かず「私、お姉ちゃんになるの？」と何度も聞いていたそうだ。妹が生まれるまでの間、私はおぼの家に預けられた。初めて母と父がいない誕生日も迎えた。なんだか妹に母を取られている気がして、寂しくて、でも我慢していた。お姉ちゃんになるためだと言つて。やがて妹が生まれた。

それからの日々はとても忙しそうだった。何かある度に「妹が…妹が…」なにか起こす度に「お姉ちゃんなんだから」。私はもううんざりだった。こんな妹に振り回される毎日は嫌だ、お姉ちゃんなんかにならなきゃよかった、妹なんていなければ…。そう思った私はある日、つい軽い気持ちで妹の顔に枕を押しつけた。すると妹は大声で泣き出した。

「何やってんの！」

母が怒鳴りながら駆けつけた。私は今まで我慢してきたものが爆発するように泣いた。母はたくさん話を聞いてくれた。寂しかったことも、お姉ちゃんをやめたくなつたことも、妹がいらないと思つたことも、すべて「それでも、あなたはお姉ちゃん、この子はあなたのたつた一人の妹なのよ。」

母は言った。私はさつきまでの行いをひどく後悔し、妹の手を握つた。今にも壊れそうなほど、小さく尊い手。私はこの子を守らないといけない。初めて、妹ができたという意識が、責任が、そして愛が心に宿つた気がした。

あれからもう十年が経つ。絶賛反抗期中の妹は、今日も私に嘸みついてくる。でもそれでいい。ずっと笑っていてほしい。だって君は私の大切な家族で、たつた一人の妹だから。